

## 「グローバル・サウス」論

### 1. 「グローバル・サウス」論の登場

\* 「グローバル・サウス」の概念は、ほぼ1980年代以降のグローバル化と新自由主義の拡大を主要な契機として登場した、「南」と「北」の諸関係を内包する呼称。20世紀から21世紀への転換期に向かう時代的構造変容とその特徴を背景にした「南」と「北」の諸関係の相互浸透・依存あるいは融合・統合化の深まったグローバルな空間を前提とした概念。

\* 「グローバル・サウス」の概念を採用するには次の3点を明らかにしておく必要がある。

① 「途上国」や「南」といった概念が不十分になった背景と理由。(→グローバル化の加速度的進行、国民国家の位置の相対化、「脱領域化」と「再領域化」)

\* 「グローバル・ノース」と「グローバル・サウス」への分化。

\* グローバル化時代の「南」はかつての「南」ではなく「グローバル・サウス」に変容。

\* 「発展途上」という用語のも、「先進」と「途上」という二項対立の有効性の喪失。

② 「従来の区分」と「グローバル・サウス」概念の相違点。

\* グローバル資本主義の新たな段階を含意。第一に、真に多国籍な資本の台頭、第2に多国籍資本家階級の出現、第3に国家の多国籍化(=多国籍ネットワークへの国民国家の吸収)。

\* 自由貿易協定(FTA)は多国籍資本家階級への一層の権力集中とローカルな共同体の解体→富裕な人々と貧しい人々の分極化の進展をもたらす。

③ 「グローバル・サウス」概念を用いることで21世紀に向けてどのような視角を獲得できるか。「グローバル・サウス」概念は21世紀の世界認識を広げられるか?

\* 「グローバル・サウス」概念は、「中心」と「周辺」間の、そして「北」と「南」との区別が部鮮明になっている事実を反映しており、グローバル化の下で「国境を越えて組織され、拡散されている新たな社会的ヒエラルキーや不平等の諸形態が出現している。「中心」と「周辺」は、地理的カテゴリーというよりも社会的カテゴリーになっており、トランスナショナルな社会構造のなかの位置」を意味する。

\* 「グローバル・サウス」概念は、国民国家中心の分析から離れ、新たな段階に向かうグローバル資本主義の推進力としての多国籍資本と多国籍化する国家によるグローバル世界の再編成の現状と行方を考察するための有効な理論的枠組みである。

### 2. 「グローバル・サウス」論の検討課題・論点

① 米国のヘゲモニーの衰退、その実態の分析は「軍事・経済・金融だけでは」判断できない。地域的ヘゲモニーの衰退と含めたような「関連性」を考慮する必要がある。

② 中国の台頭とBRICSの政治的・経済的意味の長期的な視点からの分析。(←「国民国家」的視点からでは十分な分析ができない。)

③ 多国籍的なエリートが支配する制度的ネットワークと諸機関におけるヘゲモニーの対抗関係と統合メカニズムの分析。(IMF、世銀、ダボス会議、EU諸機関、AIIB、BRICS開発銀行、上海協力機構等々)。

### 3. 抵抗勢力としての「グローバル・サウス」

\* ネグリ/ハートの「マルチチュード」

\* 2001年1月以降のWSF(世界社会フォーラム)の展開

\* ラテンアメリカの左派・中道左派諸政権の役割(ALBA、CELAC、UNASUR等の地域機

関)

\* 2011年以後の世界的な「99%のオキュパイ運動」(スペインでは2010年5月15日運動で先行) →米民主党サンダース支持派、スペインのポデモス